

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成29年12月12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 薬学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 浅 岡 希 美

助 成 の 種 類	<b>平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成</b>	
研 究 集 会 名	第47回北米神経科学学会2017	
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )	
発 表 題 目	Chronic treatment with a selective serotonin reuptake inhibitor increases spontaneous activity of dorsal raphe nucleus serotonergic neurons through activating L-type voltage dependent Ca <sup>2+</sup> channels	
開 催 場 所	アメリカ合衆国・ワシントンDC・Walter E. Washington Convention Center	
渡 航 期 間	平成29年11月10日 ～ 平成29年11月20日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000円
	使用した助成金額	250,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	交通費: 152,660円
		宿泊費: 97,340円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回参加した北米神経科学学会は参加者も多く、また開催地もワシントンDCということもあり、交通費・宿泊費ともに高額であったため、今回の助成がなければ参加することはできませんでした。助成をいただけたことにより、学会に参加でき、貴重な情報を得ることができたこと、大変感謝しております。	

## 成果の概要

薬学研究科 博士課程 3 回生  
浅岡 希美

今回、私はアメリカ合衆国、ワシントン DC で開かれた北米神経科学学会年会に参加しました。また、学会後は、ニューヨークのコロンビア大学において Dr. Veenstra-Vanderweele 研究室および Dr. Simpson 研究室を訪問し、情報収集及びセミナーにて発表を行いましたのでこれらの成果について、ここで報告いたします。

北米神経科学学会年会は、毎年3万人以上が参加する大規模学会であり、神経科学分野の最新知見の発表の場です。特にポスター発表は、数千演題にも及ぶ発表があり、多種多様な分野の最新のデータについてディスカッションが行われます。今回、私は、情動調節に重要な働きを担う中脳・縫線核のセロトニン神経の活動が、抗うつ薬の一種である選択的セロトニン再取り込み阻害薬によって増強されるメカニズムについてポスター発表を行いました。私にとって今回の発表は初めての国際学会での発表であり、英語での説明やディスカッションの経験を積むことができました。また、4時間の発表時間内に多くの研究者の方々から有益なアドバイスや鋭いご指摘をいただくことができ、今後研究を進めるうえでのヒントを数多く得ることができました。自分の発表以外にも、5 日間の学会期間中、他研究室の発表もじっくり聞くことができ、各分野の動向のみならず、最新の実験手法などの今後の研究に役立つ情報も知ることができました。

学会参加後はニューヨークへと移動し、コロンビア大学にて 2 カ所の研究室を訪問しました。まず初めに訪れた Dr. Veenstra-Vanderweele 研究室は、強迫性障害や自閉症の病態解明や治療について、動物を用いた基礎研究から患者、特に小児患者での臨床研究まで幅広い手法で研究を行っている研究室です。私たちの研究室では、最近、強迫性障害の薬物治療に関する基礎研究を開始して幾つかの知見を得ていたのですが、開始直後ということもあり、問題も抱えていました。そこで、今回の訪問は、その問題解決のためのディスカッションや最新情報の収集を目的としておりました。先方の都合もあり、短期間の訪問でしたが、データの問題点やその改善について、数多くのアイデアを示して頂き、かつ未公開の最新知見についても情報を頂けるなど、非常に有意義な訪問となりました。

続いて訪問した Dr. Simpson 研究室は、意欲や学習のメカニズムについての基礎研究を行っている研究室です。うつ病や強迫性障害では、意欲や行動学習に異常がみられるため、こうした指標を今後の研究に取り入れるべく、今回の訪問では意欲・行動学習の評価手法について情報を得ることを目的としておりました。当日、実際に記録中の様子を見学させていただき、装置の使用方法から細かなコツまで実物を見ながら教えていただけたことで、論文だけでは得られないノウハウをつかむことができました。また、午後から行われた研究室のセミナーにも

参加し、データの発表を行ったところ、学会では得られないような、細かな部分にも質問やコメントをいただくことができました。さらに研究室の他の大学院生の方の発表も聞くことができ、論文発表される前の最新の知見や、日本とは異なる大学院生の研究への意気込みを感じることができ、私自身のモチベーションを高めることもできたと感じております。

今回のアメリカへの学会参加、および研究室訪問により、日本では得られない情報、経験を得ることができ、また、訪問先の研究室の先生方をはじめとする多くの研究者の方々ともつながりを持つことができました。この経験は、私にとって大きな刺激となり、今後の研究の糧となると考えております。最後となりましたが、今回このような海外での有意義な経験を積む機会を与えてくださった貴財団に、心より御礼申し上げます。